

令和5年度 校内研究の概要

1 研究主題

「挑み、楽しみ、つながりながら、自ら学び続ける子供の育成」
～自他への気づきを深め、共に成長する体育科の学び～

2 研究主題設定の理由

新学習指導要領では、体育科の目標として「生涯にわたって心身の健康を保持推進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成」が掲げられている。子供達が生涯において、運動やスポーツに親しんでいくためには、体育活動を通して身に付けた力を生きて働く力にしていけることが必要である。そのためには、様々な課題を自分事として捉え、主体的に解決していこうと「挑み」、新たな知識や技能を身に付けながら、運動の「楽しさ」を実感することが大切である。また、仲間や地域、教材と主体的に「つながる」ことを通して思いを深め、「自ら学び続ける」ことによって、知識や技能ばかりではなく、学ぶ力を高めていきたいと考える。

本校は、令和5年度に開催される第62回全国学校体育研究山形大会における授業公開校として研究を行なっている。令和3年度の1年目は、体育の全領域を通して、子供達が運動の楽しさやよさに触れる授業づくりを実践してきた。成果として挙げられたことは、各領域の特性を生かした授業づくりを進める中で、子供一人ひとりが技能や知識を高め、運動する楽しさに触れる姿が見られたこと。また、子供の興味関心を高める教材を考え、練習の場を工夫したことで、子供の主体的な活動につながったことである。

そこで明らかになった課題をもとに、令和4年度は、「ありのままの自分を受け入れる」ことや「異なる価値観に気付く」こと、合わせて「互いの良さを生かし合う」ことの実現を目指し、『学び合う過程』を丁寧に積み重ねる授業づくりを行った。このことは、「豊かなスポーツライフを持続させる」ための資質・能力の育成に直結すると考える。特に、「自分への気づき」や「多様性の受容」は、自らの生き方をよりよく向上させていく「ヘルスプロモーション」につながる大切な視点であり、これは体育領域のみならず保健領域や他教科と連動させながら、学校全体で育成すべき資質・能力と考える。それらを踏まえ、2年目は、具体的な以下の3つの柱を立てて研究を進めた。

- ・学校教育全体で育成すべき資質・能力を整理した上で、子供の意識や実態をもとに「課題が自分ごと」となるよう、場づくりや単元構成及び授業展開を考えること。
- ・豊かなスポーツライフの根本である「ヘルスプロモーション」を育成する視点から、授業研究において「体づくり運動」と「保健」を関連させることのよさ、価値について整理しながら授業づくりに取り組むこと。
- ・学び合う過程において、子供たち自身が「自己の心身」や「仲間との違い」に気づき、将来的に運動の日常化や健康的な生活に向かう素地を養えるようにすること。

授業実践を行った結果、新たな課題と成果が明らかになった。「体づくり運動」では、子供の主体的な運動につながる学習構成を検討する中で、本単元で育成すべき根本の動きを踏まえながら、『正しい行い方』を知ることの必要性である。楽しさの中にも正しい動きを身に付ける場が重要であり、掲示物や仲間との交流を通して、きちんと捉えていくことが求められる。さらに、ICTを活用して、個に合った課題を設定したり、共有化したりすることが課題として挙げられる。

「保健」では、子供が課題解決していく過程の中で『知識に触れながら、確かな理解につなげ、自分事にしていく』ことによって、主体的で深まりのある学びになっていく

ことが分かった。教えるべき知識や理解させるべき知識を精選し、本時の目標に合った授業展開を検討していく必要がある。保健で学んだことを実践につなげていくことが課題として挙げられる。3年次も、授業を通してめざす子どもの姿に迫っていきたい。

3 研究の仮説

子供が他とつながり、より多様な価値に触れる「学び合い」を通して、自他の気づきを深めたり、共に高め合ったりすることができれば、自ら学び続ける子供が育つであろう。

体づくり運動の実践の仮説

運動の必要性を自分事として捉えるためには、体力テストの結果を自己分析することにより、自分の体力の課題を知ることが大切になる。自分に必要な運動を選び、さらに工夫をしていくことで課題解決につながるだろう。ICTを活用しながら自分の体への気づきを高めていけば、運動による体の変容を実感できるものと考ええる。体づくり運動の学習を行ったことにより、運動の日常化を可能にするであろうとの仮説のもと検証する。

保健の実践の仮説

保健領域の学習を自分事として受け止めるためには、学ぶことを自分事として捉える手立てが必要になる。資質・能力の三つの柱の関連を図った指導の充実や他教科等との連携を図りながら継続して意識し続けることができれば、よりよい発育・発達を目指そうとする姿が見られるとの仮説のもと検証する。

4 研究内容と方法

昨年度までの成果と課題を基に、令和5年度の第62回全国学校体育研究大会山形大会へ向けた3年次として、授業づくり及び環境整備を進めていく。また、校内研究を通して、発表領域である「体づくり運動」と「保健」で授業実践を行っていく。

方向性として、これまで大切にしてきた「子供の実態や思いを大事」にすること、「子供相互の学び合い」に光を当てることを継続し、以下の内容を整理して研究を進めていくものとする。

①子供の意識をもとに、指導と評価の一体化を重視する「単元構成」

- ・卒業までを見通した年間指導計画や系統性を踏まえた単元指導計画を作成し、子供自身が主体的に学ぶ中で、学習内容がより効果的に学べるよう単元構成を工夫する。
- ・単元構造図を作成することによって、指導と評価の一体化を図り、教師が指導したいことと、子供が学びたいことが一致するよう授業づくりを行う。

②主体的で対話的な「学び合い」の場

- ・子供同士が学び合い、必然的な交流が生まれる場をしくみながら、自身への気づきや多様な価値観を受け入れる学びを支援する。

③学びを継続・広げていくための「ICT活用」

- ・タブレット端末の活用で、自他の運動の様子やより良い運動への気づきなど、運動の可視化、共有化を図る。
- ・コミュニケーションツール等の活用で、自分の個性や他者への理解を広げると共に、個々の思考の深まりにつなげる。
- ・再現可能な運動データとして記録し、前年度の取り組みを次の学年に生かす。